香港夏季国際映画祭2025：必見の映画とプログラム10選

『ただの事故 (It was just an accident)』から『エディントン (Eddington) 』まで、8月13日から25日まで開催されるサマー・インターナショナル・フィルム・フェスティバルで見逃せない10本のハイライトをご紹介します。

ジェームズ・マーシュ

2025年7月30日

香港国際映画祭（HKIFF）では毎年夏、サマー IFF を開催します。これは、世界中から集められた最新の映画祭作品、将来の人気作、復元された古典作品など、観客を喜ばせるさまざまな作品を披露するミニショーケースです。今年のラインナップには、物議を醸しているイランのジャファル・パナヒ監督のパルムドール受賞作『It Was Just an Accumulation』など、最近のベルリン映画祭やカンヌ映画祭の注目作が数多く含まれている。プログラムにはドキュメンタリー、アニメーション、短編映画のセクションも含まれており、リマスターされた名作の魅力的なセレクションも見逃せません。ミロス・フォアマン監督によるアカデミー賞受賞作『カッコーの巣の上で』（1975年）と『アマデウス』（1984年）がスクリーンに戻ってくるほか、ラテンアメリカの人気作であるガエル・ガルシア・ベルナル主演の『アモーレス・ペロス』（2000年）と『モーターサイクル・ダイアリーズ』（2004年）も再び上映される。バフラム・ベイザイエの忘れられたイラン演劇『Downpour』（1972年）が新たな命を吹き込まれ、モーリス・シュヴァリエのミュージカル『One Hour With You』と『Love Me Tonight』（いずれも1932年）はこれまで以上に映像も音も素晴らしいものとなっている。今年の夏祭りの見逃せない10のハイライトをご紹介します。

1.『It Was Just an Accident』

今回の映画祭のオープニングを飾るのは、今年のカンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞した作品です。ジャファル・パナヒ監督の最新作は、元政治犯で現在は整備士として働く男が、義足がきしむことから、ある客をかつての拷問者だと思い込むというストーリー。男を家まで尾行し、誘拐するが、次第にその決断に疑問を抱き始める。イラン政府の正式な許可を得ずに撮影を行ったパナヒ監督は、再び自国の権威主義体制を批判している。映画祭では、パナヒ監督の新作のアジア初上映に加え、『オフサイド』『これは映画ではない』『タクシー』といった名作を含む10本の回顧展も開催される。

2.『Kowloon Generic Romance』

今年のクロージング作品は眉月じゅんの同名人気漫画を原作とした日本映画です。この作品は、今もなお存在し繁栄している悪名高い九龍城砦の住宅街をイメージしたもので、かつて恋愛関係にあった不動産会社の若い従業員2人に焦点を当てています。吉岡里帆と水上恒司が主演を務めるこの都会のファンタジーは、懐かしい雰囲気と深まる謎が織り交ぜられています。

3.『Eddington』

モダンホラーの傑作『ヘレディタリー／継承』と『ミッドサマー』で名声を博したアリ・アスター監督は、トランプ政権下のアメリカが抱えるより身近な恐怖に目を向ける。ホアキン・フェニックスは、ニューメキシコ州の小さな町の右派保安官を演じ、新型コロナウイルス感染拡大の真っ只中、ペドロ・パスカル演じる左派市長と対峙する。『エディントン』は、暗い風刺に満ちながらも、破滅の瀬戸際にある国家を容赦なく分析し、最も恐ろしい不条理喜劇となっている。

4.『The Mastermind 』

ジョシュ・オコナー（『チャレンジャーズ』）、アラナ・ハイム（『リコリス・ピザ』）、ジョン・マガロ（『パスト・ライヴズ』）が主演を務めるケリー・ライカード監督の異色の強盗映画。舞台は1960年代末、アイデンティティと国際的地位に葛藤するアメリカ。若い父親（オコナー）は家族を支えるため、軽犯罪に手を染めるが、やがて大きな計画を企み始める。抽象画家アーサー・ダヴの絵画4点を盗むのだ。『ファースト カウ』や『ウェンディとルーシー』の監督は、一見小さく単純な物語を純粋な詩へと再構成し、際限なく人を魅了する個人的な視点を披露しています。

5.『 Alpha 』

2021年、幻想的なボディホラードラマ『ティタン』でカンヌ国際映画祭パルムドールを受賞したフランス人監督ジュリア・デュクルノーが、今年初め、女性の身体と現代社会におけるその役割を探求するダークなジャンル映画を携えてクロワゼット劇場に帰ってきました。ゴルシフテ・ファラハニとタハール・ラヒムが主演を務める本作では、「A」のタトゥーを刻まれた少女が、謎のウイルスに感染した可能性もあり、拭い去ることのできない汚名を着せられていく物語が描かれます。この映画はカンヌで賛否両論を巻き起こしたが、デュクルノーは今でも今日の映画界で最も刺激的な女性監督の一人である。

6.『Family Matters』

台湾の映画監督パン・ケイン氏は、デビュー作となる長編映画で、ゴールデン・ホース賞にノミネートされた短編映画のテーマを広げ、10年間にわたってひとつの家族が直面した困難を詳細に描いた複雑で感情的に不安定なタペストリーを織り成しています。閩南語で撮影され、複雑で非線形な構造を採用したこの映画は、「何が家族を結びつけるのか？」という疑問を提起し、その答えとして、野心的でユニークな注目すべき新しい映画界の才能としてパンを紹介している。

7.『New Group』

日本映画は高校時代の悪夢のような体験を描くことを好むが、下津優太監督の独特のシュールな視点でそれを描いた作品はおそらく他にはないだろう。2023年の『みなに幸あれ』に続く彼の2作目の長編映画では、山田杏奈が高校生のアイ役を演じ、アイはクラスメイトたちの間でアクロバティックな人間ピラミッドとして現れる奇妙なカルト的な精神に直面する。部分的には心理的なホラー映画であり、部分的には社会評論であるニュー・グループは、個人の声が封じられ、群衆心理が人々を危険で錯乱した方向へ導く社会を非難しています。

8.『Dangerous Animals』

今年最も楽しくて面白い作品の一つは、血まみれのプロムコメディ『The Loved Ones』で最初に話題を呼んだオーストラリアのジャンルスタイリスト、ショーン・バーンの作品です。悪評高い主演男優ジェイ・コートニーは、何も知らない観光客をサメ観察ツアーに連れ出す気が狂った船長役を演じ、殺人魚が彼らにとっての小さな問題であることに気づくのが遅すぎたため、変身を遂げ、キャリアを蘇らせる演技を披露する。スティーブン・スピルバーグ監督の名作『ジョーズ』の公開50周年を記念した『デンジャラス・アニマルズ』は、映画ファンに水に近づかないようにするもう一つの説得力のある理由を与えている。

9.『 Welcome to Lynchland』

今年は、映画界で最も奇抜で唯一無二の表現力を持つデヴィッド・リンチが逝去した年でした。来月、香港国際映画祭（HKIFF）の「シネファン」プログラムでは、リンチ作品の決定版となる回顧展を開催します。『イレイザーヘッド』から『インランド・エンパイア』まで、長編映画全10作品を上映します。観客の興味をそそるのに、ステファン・ゲズの新作ドキュメンタリー以上に良いものがあるだろうか？『ウェルカム・トゥ・リンチランド』は、リンチの人生と作品、イメージと美学に焦点を当て、カイル・マクラクランやローラ・ダーンをはじめとする主要な共演者たちの新たなインタビューを収録している。

10.『 The Red Spectacles/Love & Pop』

カルト的な人気を誇る日本の古典作品のファンなら、アニメ界のレジェンドである押井守と庵野秀明が新たにリマスターした作品で、特別な映画を二重に楽しむことができます。『ゴースト・イン・ザ・シェル』で私たちの心を揺さぶる何年も前、押井監督は、限りなくシュールでジャンルを超越したディストピアアクションスリラー『紅の眼鏡』で実写映画に初進出を果たし、これが後の人気作『野良犬』や『人狼 JIN-ROH』の基礎を築いた。同様に、庵野は独創的なアニメシリーズ「新世紀エヴァンゲリオン」に続いて「ラブ＆ポップ」を制作した。これは、援助交際の危険な世界で手っ取り早く金を稼ぐ少女たちの活躍を描いた、学校生活と思春期の機能不全を非常に独創的に描いた作品です。

サマーIFFは8月13日から25日まで、様々な会場で開催されます。プログラムの詳細は、HKIFFのウェブサイトをご覧ください。